
F-Project

～耳をすませば～

第1章 プロジェクトの概要など

1. プロジェクトの名称・目的

- ・名称 「F-Project ～耳をすませば～」
- ・目的

京都府は関西広域連合のなかでカウンターパート方式によって福島支援を担当し、福島県から東日本大震災と福島第一原子力発電所事故の被災者を多く受け入れている。ところが、実際には平成23年12月をさかいに京都地域では支援活動がほとんどされなくなっている。しかし、京都大学で平成24年4月14日に行われた講演会「チェルノブイリの教訓に学ぶ」によると、京都地域での支援はまだ必要とされているということが分かった。そこで、福島県立相馬高校の演劇「今 伝えたいこと（仮）」に着目した。この相馬高校の演劇で語られる福島に今も生きる若者の想いを京都および関西地域の人々に広く伝えるとともに、被災者のニーズに応じた京都でできる長期的なボランティアのかたちを探ることが私たちの目的である。

2. 代表者および構成員

・代表者

田尻 知華 教育学専攻 2回生

・構成員

網田 洋志 教育学専攻 2回生

大原 澄久 教育学専攻 2回生

岸浪恵理子 教育学専攻 2回生

嶋田 愛美 教育学専攻 2回生

下野 太郎 発達障害教育専攻 2回生

新宮さつき 教育学専攻 2回生

前田秋季子 発達障害教育専攻 2回生

渡辺 玲 発達障害教育専攻 2回生

山口 恵未 家庭領域専攻 3回生

澁川 知史 教育学専攻 5回生

3. 助言教員

岡部 美香先生（教育学科）

第2章 内容・実施経過

定期的な話し合いに加え、主に次のような活動を行った。

〔5月〕

・福島県立相馬高校の放送局による劇「今 伝えたいこと（仮）」を鑑賞し討論

〔6・7月〕

・宣伝活動
・京都府府民力推進課インタビュー
・伏見青少年活動センターインタビュー
・国立国会図書館関西館・京都府立図書館で調査

・神戸松蔭女子学院大学 勝村弘也先生と打ち合わせ

・静岡大学 小林朋子先生からの情報提供
・プログラム作り
・アンケート作り

〔8月〕

・東日本大震災復興支援事業「耳をすませば」開催

・福島県立相馬高校生と京都教育大学附属高校生と京教生との交流会

〔9月〕

・「耳をすませば」の反省会

〔10・11月〕

・京都新聞「@campus」の記事作り
・立命館大学での上映会の打ち合わせ

〔12月〕

・立命館大学（衣笠）上映会
・立命館大学（びわこ・くさつ）上映会
・京都新聞本社にて編集会議
・福島県立相馬高校生にアンケートの依頼

〔1月〕

・放射線防護についてのインタビュー
・京都新聞「@campus」の記事完成
・福島県立相馬高校生を対象としたアンケート

ト結果の考察)

第3章 結果・成果

1. 「耳をすませば」

～震災後に京都で何が出来るかを考える～

平成24年8月19日に京都市呉竹文化センターで東日本大震災復興支援事業を行った。プログラムは次の通りである

第1部 演劇上演「今 伝えたいこと (仮)」

福島県立相馬高等学校 放送局

第2部 講演「震災ボランティアを考える

—阪神大震災を振り返りながら—

神戸松蔭女子学院大学

勝村弘也教授

調査報告「支援のこれからを考える」

F-Project～耳をすませば～

(1) 内容と結果

第1部 福島県立相馬高等学校 放送局の生徒のみなさんを招き「今 伝えたいこと (仮)」の上演をしていただいた。劇からは彼女たちの将来に対する不安や大人への怒りなどが強烈に伝わってきた。来場者からのアンケートでも、「子どもの声が社会に、政治に届いていない、という訴えが心に響いた」「演技に圧倒された」「報道では取り上げられない高校生たち、子どもの声が聞けて、大変興味深かった」「今まで認識が甘かった」「見えない部分の復興について考えさせられた」などの感想がよせられた。関西までなかなか届くことのない被災地の高校生の声は多くの人々の心を動かし、時とともに薄れかけていた東日本大震災への関心を取り戻すことができたといえる。



第2部

講演:「震災ボランティアを考える—阪神大震災を振り返りながら—」と題し神戸松蔭女子学院大学の勝村弘也教授からご講演をいただいた。阪神淡路大震災でのご自身の体験から、地域のコミュニティの中で絶えず変化する情報を共有することの重要性や、阪神大震災と東日本大震災の共通した問題として、行政が定めた基準で「被災者」を限定しその基準からはずれた人は支援の対象からこぼれてしまうこと、借り上げ住宅の期限が切れるとそれ以降の住む場所については行政からの支援が得られないことなどをお話しいただいた。また、支援をする側の姿勢として、被災者はそれぞれ名前を持った人間であることを忘れてはならないこと、復興の速度は人によって異なり一生かけて復興の道を歩む人もおり長い目をもって支援を行うべきであること、人と人がつながることで無限の可能性を開くことができること、などもご教示いただいた。十数年も前に起こった阪神大震災でさえも、被災者の方々にとってはまだ終わったことではなことに気づかされた。また、日々変化する被災された方々の「今」に目を向け続けることが重要なのではないかと考えさせられた。調査報告:これまでの調査・研究を発表した。

①京都府下で行われてきた支援活動について

(ア) 京都市伏見青少年センターでは京都に避難してきた子どもたちを対象に学習支援の実施、京都の学生を対象に話す場の提供、震災で変化した価値観やこれからつくりたい社会像を京都にいる若者がカメラに向かって語る「アーカイブ」の作成を行っている。

(イ) 京都府府民力推進課へのインタビューからは、京都に避難してきている人々の実態把握と行政・民間それぞれが行ってきた支援の概要が分かってきた。京都府に登録している人は自主的避難者、強制的避難者を合わせて約420世帯(約1000人)にのぼる。また、行政が中心となって行ってきた支援は、上限

3年の間は無料で公営住宅を貸し出す住宅支援、避難者に健康診断のお知らせやメッセージなどを届ける月2回の定期便、1~2ヶ月に1回のペースで行われる行政・民間・避難者による意見交換の場の設定、などである。民間では多くの団体が支援のために動いており、これからは行政が苦手とする柔軟で細やかな動きのできる民間団体の役割が大きくなっていくという。そのため、行政は民間への資金援助を活発に行っていく姿勢である。また、上限3年と決められた住居の期限がきたときに混乱を避けるための対策もこれから必要になってくるようである。

②長期的な支援の必要性とその在り方

(ア) まず、東日本大震災後の福島と共通性の多い三宅島雄山噴火の被害についての論文(典拠：大森哲至・藤森立男(2000)「繰り返される自然災害と被災者の長期的な精神健康の問題」『応用心理学研究』69—78頁)から避難者の長期にわたる精神健康への影響をみた。この二つの災害には、長期間に及ぶ避難生活、安全確保の不確実性、生活基盤の喪失の3つの共通点がある。三宅島雄山噴火から9年後に被災者に行ったアンケートによると約6割の人が「ハイリスク者」だと判定された。その要因としてあげられているのが、避難生活の長期化による孤立感の高まり、コミュニティ崩壊による悲哀感情のあらわれ、生活再建のめどがたたないことへの不安や苛立ちがあげられる。福島の現状と三宅島の災害との共通性を考えると、ここから東日本大震災における長期的な支援の必要性がみえてくる。

(イ) 次に、被災地から離れた避難地で被災者が抱えることの多い問題をみていく。(典拠：田中優(2011)「非被災地における被災者支援の社会心理学的問題」『人間関係学研究』79—88頁)被災地ではない地域に避難してきた被災者は、自分が被災者であることを避難先の地域の人々に隠したい意識が強い。

これは、様々なものを失った自分と不自由なく暮らす避難先の人々とのギャップを再認識するのが不快な体験であることが要因である。

これに加えて次の2種類のストレスを抱える避難者も少なくない。一つ目は外部社会が被災者に押し付ける被災者的役割というものからくるストレスである。これは、メディアなどが勝手に被災者としての役割を押し付けるために生じる。その役割と実際の被災者の現状とは異なることが多く、そのギャップが被災者のストレスを増幅させ苦しめるのである。二つ目は、被災者が抱く心理的負債感である。これは、他者から援助をされることで、支援者に対して感謝の想いだけでなく負い目も感じ、返礼を義務付けられたような不快感をうんでしまうということである。この二つは先に述べた「被災者であることを隠したい気持ち」とも関連し、必要な援助要請を抑止し結果的に支援活動を滞らせることになる。

これらのマイナス効果を低減させるためには、支援活動をする上で「援助効果」と「援助成果」という二つのことを意識することが重要である。援助効果とは、援助されることによって被援助者の問題が解決することであり、「援助成果」とは、援助行為の結果として、援助者自身も恩恵を受けることである。これらが成立し援助者、被援助者が互いに与え合うプラスの効果と成果を知ること、援助者は次の活動への動機を高め結果的に長期的な支援を可能にする。そして、被援助者も自分が助けられるだけの存在ではないことを認識し心理的負債感は軽減される。

以上のことを踏まえ私たちは、これからの支援活動に必要なことは「支援者と被災者という立場からではなく人と人としての対話」なのではないかと考えた。支援者と被災者それぞれの負担ばかりが増幅し互いの想いに隔たりが生じないように、支援者と被災者という枠を越えて積極的に対話をするのである。それによって被災者の日々変化する多様な欲求

を把握できるであろうし、「援助効果」「援助成果」を互いに感じ取ることができるのではないだろうか。また、私たちにできることの一つとして、定期的に震災後の「今」の状況を広く発信していくことがあげられる。震災のこと、被災者のことをずっと忘れずにいることも一つの支援の在り方であるとする。

(2) 来場者にとったアンケート結果

回答者数 70名

1.①企画をどのように知りましたか

ポスター (3%) ホームページ (3%)
広告・ビラ (13%) 知人から聞いて (53%)
新聞 (8%) その他 (20%)

2.②劇はいかがでしたか

大変良かった (72%) 良くなかった (0%)
良かった (25%) 無回答 (2%)
普通 (0%)

③講演はいかがでしたか

大変良かった (30%) 良くなかった (2%)
良かった (30%) 無回答 (26%)
普通 (12%)

④報告会はいかがでしたか

大変良かった (22%) 良くなかった (1%)
良かった (29%) 無回答 (36%)
普通 (12%)

3.⑤お住まいはどちらですか

京都市 (54%) 京都市以外の京都府下 (12%)
その他 (33%) 無回答 (1%)
その他 内訳
福島県 (13%) 東京都 (13%) 大阪府 (30%)
奈良県 (9%) 滋賀県 (4%) 兵庫県 (22%)
無回答 (9%)

⑥職業を教えてください

大学生 (19%) 教育関係者 (29%) 高校生 (2%)
その他 (46%) 無回答 (4%)

4、プログラム全体を通して感じたことや、今あなたにできることは何か(支援の在り方)について思うことがあればご記入ください。

回答の一部

・劇＝虚構ではなく真実の叫びなので、圧倒された。

・生の声を聞く大切さを実感した。

・語りつくせない想いやもどかしさをまだ人生経験の少ない若い人たちが抱えて生きていかななくてはならないことの重さを考えさせられた。

[アンケート結果をふまえて]

宣伝活動は主に学内外でのビラ配りとポスターの貼付、新聞への掲載であったが、「知人から聞いて」参加して下さった方が多かったため口コミの効果の大きさを学んだ。また、劇の感想として回答者全員が「大変良かった」「良かった」と答えており、高校生の想いを多くの方々が真摯に受け止めて下さった証ではないかと考えられる。反省点としてあげられるのが相馬高校生のみなさんと同世代の方々にあまり来ていただけなかったという点である。自由記述欄では震災のことを忘れない、被災地の声に耳を傾けたい、自分にできることは何かを考えたい、などの意見が多く、震災に対する意識を変えていただけたのではないと思う。

2. 福島県立相馬高校生との交流会



「耳をすませば」の翌日(平成24年8月20日)に、劇だけでは語れない想いを聞いたり震災へのそれぞれの想いを語ったりする会を行った。参加者は、福島県立相馬高校の放送局の9名、京都教育大学附属高等学校の3年生2名、大学生11名であった。始めにアイスブレイキングで簡単なゲームをした後、

放送局のみなさんが作成した福島の現状や福島の高校生のリアルな声を収めた映像資料をみた。それから二つのグループに分かれフリートークを行った。話された内容としては、演劇の脚本のこと、将来のこと、福島から避難した人のことをどのように思うか、震災直後のこと、震災から1年以上経った今の心境などであった。いまだに続く地震に、慣れたという人もいれば、落ち着かなくなるという人もおり、心の復興の速度が人それぞれであることを改めて感じた。また、放射能の被害が彼女たち自身の健康や将来の自分の子どものことなど果てしなく続く不安をもたらしていた。これを目の当たりにしたとき、果たして自分たちに何ができるのだろうかと考えさせられた。この当事者の痛みをより多くの人が知ろうとするべきであるし、共に考えるべきである。今回、京都にまで出向いて聴かせてくれた想いを大切に、広く伝えていかなければならないと考える。

3. 立命館大学での「今 伝えたいこと (仮)」のDVD上映会

平成24年12月3日に立命館大学の衣笠キャンパス、翌日4日にびわこ・くさつキャンパスにて演劇「今 伝えたいこと (仮)」のDVD上映会を行った。8月19日の「耳をすませば」にお越しにいた立命館大学の職員の方からお話があり上映会を行う運びとなった。演劇のDVDを見た後に意見交換会を行い、演劇の感想、震災に対しての想い、これからの支援の在り方などについて話した。参加者の大半が立命館大学の学生であり、同世代で意見を共有する機会がもててよかった。出された意見としては、震災はすでに終わったことと思っており高校生の想いを知り現状に衝撃を受けたという声が少なかった。また、今後はメディアに影響をされずに自分で正しい情報を取りに行くことが重要であるとの声もきかれた。以下来ていただいた方を

対象としたアンケート結果である。

1-① 劇はいかがでしたか

大変良かった (76%) 普通 (0%)
良かった (24%) 良くなかった (0%)

1-② この会に参加して良かったですか。

大変良かった (82%) 普通 (0%)
良かった (18%) 良くなかった (0%)

2 被災者への支援が不十分であるとの意見もありますが、それはなぜだと思いますか。

回答の一部

- ・被災者が何を望んでいるか分からないから
- ・メディアでの取り上げ回数が減ったから
- ・テレビで被災者の笑顔が多く取り上げられているから

3. あなたの職業を教えてください。

大学生 (76%) 教育関係者 (12%)
高校生 (0%) 無回答 (12%)

4. プログラム全体を通して感じたことや、今あなたにできることは何か (支援の在り方) について思うことがあればご記入ください。

回答の一部

- ・自分の知っている情報と実際の現状との違いに差がありすぎて驚いた。
- ・メディア越しではない当事者の声を聞く
- ・被災者とそうでない方が接する機会を増やし、それぞれの想いを知り相手のことを考えること

[アンケート結果をふまえて]

学生の参加者が多かったために、8月19日にはあまり聞けなかった世代の意見が聞けたのが良かった。また、2, 4の記述欄から当事者の本当の声を聞く機会が少ないことが見えてきた。当事者の現状を知らなければ支援の必要性さえもみえてこないことも考えられる。この会をきっかけに、メディアでは流れない被災地や被災者の現状に目を向けたいとの意見を多く聴けて今回の上映会の意義を感じることができた。

上映会を終えて、メディアの力の大きさを

改めて知った。メディアでの取り上げ回数が減れば、多くの方は当り前のように関心が薄れ、終わったことになってしまう。いかにメディアに意識を支配されているかを感じた。新聞やテレビで得られる情報が全てではないことを多くの方が理解しなければ当事者の意見というのは常に聞き逃されてしまう。私たちが DVD 上映会等を通じて被災者の声を広げることの重要性を再度感じた。

第4章 まとめや反省、これからの展望

支援というと何か大きなことを為さなければいけないと構えてしまいがちである。しかし、決して大きくなくとも小さなことを継続的に積み上げていくことが大切なのではないだろうか。被災地の声に耳を傾けること、その声を定期的に広く伝えていくこと、を続けていくだけでも被災者の方々の力になるのではないかと考える。相馬高校生の声を伝える場をいくつか設けてきたが、その声を目の当たりにした人が 福島への想いを強めたり、支援について考えたりして下さった。このように少しずつでも人々の意識を変えていき、また、被災地の声を定期的に伝えていくことで、多くの人々が被災地の今を気にかけるようになるのではないかと考える。

また、阪神大震災の教訓や、三宅島雄山の被災者を対象にした研究から、当初考えていた以上に長期にわたる支援が必要であることが分かった。被災者、支援者お互いにとって負担だけが増幅しないような支援の在り方をこれからも考えていきたい。

京都には福島から避難してきている方々がたくさんいるが、その方々が「福島を忘れないで」と声をあげるのにはためらいがあるだろう。避難先で被災者であることを隠したい気持ちから、被災者として目立つことは避けようとするであろうし、福島に今も生きる人々への後ろめたさを感じることも考えられる。また今、福島に住んでいる人々のなかに

も、あきらめがあったり、支援してくれている人々への遠慮から、苦悩を発信できないでいる人は少なくないと考えられる。そのような中で、今回このようなかたちで相馬高校の放送局のみなさんが京都まで、リアルな声を届けに来てくれたことは本当に貴重なことである。19日の上演会、講演会、報告会に来てくださった方々からは、福島のことを忘れないとの感想が数多く寄せられており、それだけでも大きな意義があったといえる。相馬高校生のみなさんには心から感謝したい。

反省としてあげられることは、京都に避難してきている方々とあまり接する機会をもてなかったことである。前述したように避難先で被災者であることを隠したい気持ちというものがあるようで、それを考えると踏み込むことができなかった。今後は、福島から避難してきた子どもたちに学習支援をおこなっている学生団体に参加させていただくなどをして、避難者と関わる機会をもちたい。

また、相馬高校の生徒さんたちには引き続き、福島に住む高校生の現状（2012年12月現在）や、1年半経った今本当に必要な支援とは何かを把握し、支援のあり方を探るためのアンケート調査に協力していただいている。結果が届き次第、支援の実態や在り方について結果・考察し、それを京都新聞の特集「@campus」（2月）に掲載する予定である。これによって、より多くの人に相馬高校生の想いを伝えることができれば、と考えている。